

## おじいさんのランプ

新美南吉

(略)

巳之助はランプに火をともした。一つともしては、それを池のふちの木の枝につるした。小さいのも大きいのも、とりまぜて、木にいつぱいつるした。一本の木でつるしきれないと、そのとなりの木につるした。こうしてとうとうみんなのランプを三本の木につるした。

風のない夜で、ランプは一つ一つがしずかにまじろがず、燃え、あたりは昼のように明るくなった。あかりをしたって寄って来た魚が、水の中にきらりきらりとナイフのように光った。

「わしの、しょうばいのやめ方はこれだ。」

と巳之助は一人でいった。しかし立ち去りかねて、ながいあいだ両手をたれたままランプの鈴なりになった木を見つめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。ながの年月なじんで来たランプ。

「わしの、しょうばいのやめ方はこれだ。」

それから巳之助は池のこちら側の往還に来た。まだランプは、向こう側の岸の上にみなともっていた。五十いくつがみなともっていた。そして水の上にも五十いくつの、さかさまのランプがともっていた。立ちどまって巳之助は、そこでもながく見つめていた。